

高校時代の同級生、筆名アングルさんこと高橋昭一君が、次は白馬山麓の柵池に行かないかと誘ってくれたのは、群馬県の尻焼温泉の帰途だった。

長編『奇妙な異星人』の主舞台は、千国街道「塩の道」である。じゃあ「塩の道」と「柵池」両方ということ、私が取材兼ねて応じたのは残暑の八月末のことであった。

糸魚川―松本迄の「塩の道」全工程、二十里(百二十km)は二、三日でも踏破不能なので、せめて小谷村千国界隈を歩く事と、懸案だった大町市「塩の道博物館」「弾誓寺」だけは見聞したかった。結局実際に歩けたのは、JR南小谷駅から柵池入口バス停松沢口間の通称千国コースである。

地元観光協会や史跡文化財保護の人々の手に寄り、全工程三十里の内、十二里余りが整備され歴史の舞台から九十年振りに甦っている。小谷村の案内書に寄れば、今の旅人のためのコースは五つ設定されており、大網峠越え、地藏峠越え、高町越え、天神道コース、そして最も往時の雰囲気を今も残すと言われる千国コースがある。

越後からの街道は、東道と西道があり、東道が主街道である。西道は、糸魚川隣の青海町から虫川・小滝・山之坊を経て、姫川に架つていた大網橋で東道に合している。東道は、歴史書に寄れば、厳密には二道あったようであるが、糸魚川で北陸道と分岐し、大野・根知を経て、信越国境に跨る大網峠を越え信州に入る。その後暴れ川の姫川と織り成すように、小谷村・白馬村から佐野坂を越え、青木・中綱・木崎の仁科三湖を辿り大町に至る。途中根知の山口や土戸で信州に入り、三

坂・地藏・大峯の峠を越え、千国の燕岩で、本街道に合する道は千国古道と称されるといふ。三坂峠(一一一五メートル)は、街道中最高所でここから国境の山々や日本海が望める。ブナやトチ、杉木立の原生林地帯を辿る道で、石仏や地藏堂がある。

前日松本の高橋君の所に泊まり、翌朝高橋君の運転で大町に向う。最初の訪問地、「塩の道博物館」は、庄屋・塩問屋だった平林家の母屋を主展示場としていた。平林家は味噌・醤油の製造販売も商う家だった由、懐かしささえ感じさせる建物である。地元ケーブルTVの放映カメラウーマンが、入口付近で撮影準備に入っている。

着いたのは未だ十時前、開館を危ぶんだが五百円支払い案内を請うと、中年の女性がにこやかに「塩の道」VTRを見せてくれた。大きな上がり框に大きな「鹽」の暖簾、帳場に座り高橋君に写真を撮ってもらう。観光客も疎ら、我々以外には後から三人連れのみ。内部に平林家の長持等の調度品や古い機織機、街道の図やポツカ(歩荷)の装具や書付、鹽蔵・味噌蔵、松本・大町独特の七夕人形さえ飾られ、隣接に鎗流馬会館もある民族資料館である。ポツカ(歩荷)の仕事で、高賃金を得られたものの、過酷な山道の民で背に荷を担ぐ運送業は、元々それ自体が商人と兼業であった。

小暗い杉子立ちの間を縫い、険しい山坂を幾つも越えて神々が通り、人や牛が喘ぎつつ通っていた千国街道「塩の道」に兼業商人ポツカ(歩荷)や牛方と呼ばれる人々が自然に生まれた。物の本に寄れば、ポツカ(歩荷)の歴史は、行商人の発生と期を一にするといふ。山中に住む三高の民とも同一視される。後に、馬借・車借と呼ばれ賤民視され、運送にたずさわる河原者という民の発生で

ある。この中から、連雀商人つまり店を持たないで、背に物を担いで歩く商人が生まれたといふ。

ポツカ(歩荷)や牛方の服装は、夏冬共に外部の着衣は汗や雪を凌ぎ易い麻を用いた。麻の上着に麻の雪袴を穿く、稼ぎ時は主に冬であったので、蒲八バキと呼ばれる、葡萄の蔓や科の樹皮で編んだ脚絆に、藁沓、時にカンジキを付け、腰に小さな莫薩を巻き、頭は全て粗い麻布で覆い、鼻と口はしつかりと手拭で包む。数食分の握り飯を背負子に付けて歩き、数人が群れて行くのである。手には、今でいうピッケル代わりの荷杖棒を持ち、疲れると荷を背負ったまま、背負子の下に荷杖棒を充てて休んだ。先に鉄の氷斧が付いていて、凍った雪面を削りながら足場を確保した。

ポツカ(歩荷)や牛方は、頼まれれば時代により季節により何でも運んだ。手甲を付け頭に頭巾のように手拭を巻いた女ポツカ(歩荷)は、手製衣類から、奥山の炭焼きに入る人の食料から炭を運んだ。男ポツカ(歩荷)は、勿論カマス入りの塩・海産物・薪・炭・米・味噌の日用品を運んだ。商いになる魚介類、春にはナガシ(鰯の一種)、初夏にはヒダラ(干鰯)、夏には昆布巻きに欠かせないニシン(鱈)、秋にシオマス(塩鱈)、正月近くには年取り魚の鰯といった按配である。信州の帰り荷は、米麦等の穀類・野菜・煙草・麻である。退館際「塩の道博物館」の女性に「弾誓寺」を聞く。

「弾誓寺」には、案内に弾誓上人の木像がある由なのだが、堂の外からは見る事ができない。可能なら住職に聴きたいことも沢山あったのだが、玄関のベルを押しても人の気配がない。止む無く賽銭を上げ足跡のみ残しその場を立ち去る。車中、私が何故この寺に拘泥したのか、弾誓上人の念仏とポツカ(歩荷)の縁等、私の調査知識を披露する。

「住職はそんな故事を知っているだろうか？」
と高橋君が私に疑問を呈する。

国道148号線沿い、高橋君ネット馴染の女性店主の店、喫茶店「ぷう」に立寄り軽食を執る。郷土が生んだスキー五輪選手荻原健司、上村愛子の二人のサイン入り色紙が壁に架っている。冬には多くのスキー客が店に立寄るのである。

車を店に預けて、歩いてJR大系線信濃森上駅から二両電車に乗り、南小谷駅下車する。乗り手少ないワンマン電車である。駅から姫川を横切る橋を渡り、坪山の急な登り、土倉、宮下、千国、沓掛と経由して松沢迄、随所に石仏がある通称千国コース「塩の道」約十数kmの始まりである。

坪山・庚申塔、小土山石仏から細い山道、大別当石仏、小谷中学裏の源長寺の参道口に三十三体の石仏、宮下石仏等、無数の野仏に遭遇する。

東海道や中山道等と異なり、派手な大名行列は無論、物見遊山や参詣の旅人も居ない物資運搬の生活の間道、塩と海産物、その荷の帰りに豆・煙草・麻を運ぶポツカ(歩荷)や牛方衆、冬季行倒れの旅人や牛供養のための野仏という説もある。千国諏訪神社境内を抜けた辺りからR433を道成りに行く、復元された千国番所跡・千国の庄資料館は今の旅人の訪れる者も無く休館中である。

千国番所跡の石碑脇の石に都都逸一句。

蟻も通れぬ千国の関を

夢は巧みに抜けていく・・・禅心

殆ど我々以外「塩の道」紀行の旅人に出逢わず、所々の「塩の道」道標にホットする。農家の人も関心を示さず、犬が胡散臭い我々をみて吠える。親坂の石仏の辺りから再び険しい山道である。この辺りは坂の難所であった由、重荷を背負つ

た牛が歩き易いようにと、幅二尺余りの道に敷石が残っている。登勾配の道を水が滴り流れ、脇に牛つなぎ石の表示、巨石を穿った穴に牛の手綱を結んだのであろうか？弘法の清水、牛や牛方等旅人が咽を潤した冷水が山から滾々と湧き出す。

冷水を口に含み暫し休憩の後、牛方宿へ向かう。高橋君が、二十数年前会社の広報担当時代に取材でふらりと泊り、牛方宿六代目民宿の主人千国徳重さん(当事七十六歳)と談笑し、可愛く元気な孫娘二人の印象が残っていると昔を語る。

沓掛茶屋で五度目の休憩である。旅人を泊めていた古い民家を買取り夏場のみ営業している由。途中我々が出会った旅人は僅か二人だったが、茶屋女将が迎えた今日の客は、我々を含め三人と笑いながら語る。その話を肴に地ビールを飲む。沓掛茶屋を辞し、だからと高原を行く、高遠石工が彫ったという前庭の弘法大師坐像に守られるかのように、赤い前垂れの百体観音像が居並ぶ。

松沢口バス停に到着。今夜泊る予定の白馬岩岳の民宿のヒュッテ・アルプの女将に携帯電話する。親切な女将が車で迎えに来てくれる。バス道を十分で下る。喫茶店「ぷう」に寄り、預けた車に乗換えて予約の岩岳の民宿に着いた。店の名「ぷう」とは最初可笑しな名だと思っただが、大風や悪霊・病魔を防いでくれるこの付近の風切地蔵の話聞き、この界限は風が強いのだと知り納得する。

高橋君が面白い所があるといつて案内された場所、それが観音原であった。四角な草の広場をぐるりと、百体余りの石仏が取囲んでいる。

案内板に 西国三十三番、坂東三十三番、秩父三十四番を合わせた百体と弘法大師像や馬頭観音を含め、全部で百八十七体の石仏が芝生広場を取り囲むように並ぶ。製作年などは定かでないが

高遠石工の作と伝えられ、旅人の道中安全などを願ったもの とある。

広場の雰囲気は、何やら妖しく靈気が充滿している。まるで草の広場に立つと、供養の靈魂が笑いながら懇談会を開催しているような、奇妙な靈場の中に居るような気持ちになる。

今回「塩の道」紀行の最大の収穫場所、それはこの観音原であった。何故この略角形の芝の原があるのか？この街道に足跡を残して亡くなった多くの靈魂が、甦って八レの日に一同に会する広場だったのではあるまいか？この野仏の囲む広場で、牛方やポツカ(歩荷)の旅人を迎えて人々は、何か祭事を催したのではあるまいか？

今回の観音原の妖しさを作品にどう生かすか？

我々が今日歩いたのは、全工程のほんの僅かな旅程に過ぎない。夕焼けの茜色に染め出す宿場脇に咲く芙蓉の花、朽ちかけた牛方宿の復元された建物、がらんとした人つ子一人居ない千国の庄の資料館の門、重い荷駄を担ぐ牛の肥爪痕を重ねた苔生した敷石、微笑みを残しながらやがて石くれとなつて路傍に立ち尽くす石仏、雑木林を渡る峡谷の風、あでやかに野を舞う名も知らぬ蝶の戯れ・・・

深夜私は、民宿の女将と一緒に飲んだ麦焼酎で酔った臍な脳裏に、昔荷杖棒を片手にして、集団で行動する牛方やポツカ(歩荷)の喘ぎ声を時に聞き、街道筋のそつした光景を思い浮かべながら、今日の泊りの岩岳の民宿ヒュッテ・アルプで携帯した小型パソコンのキイを朝まで叩いていた。

翌日は、ゴンドラとロープウェイを乗り継いで白馬梅池自然園を訪れた。民宿の女将の勧めもあって浮島湿原まで足をのばし、遅いニッコウキスゲの群生を楽しんできた。

了